釧路市立北中学校「学校だより」

北　魂

令和７年（2025年）９月８日発行　VOL 23

教職を「選ばれる職」に変えていくために

釧路市立北中学校長　冨　田　直　樹

先月27日（水）から教育実習が始まりました。今年度は北海道教育大学釧路校から音楽の教師を目指す学生が実習に取り組んでいます。毎時間、いろいろな教員の授業を参観して学習指導を学んでいます。また、指導教員の片桐一成教諭からは音楽科の教科経営はもとより学級経営について指導を受けています。実習において気付いたことや疑問に思ったことはメモに取り、当該の教員に熱心に質問したり、自分の考え方を聞いてもらったりしています。生徒たちとも積極的にコミュニケーションを図り、短期間で生徒たちと良好な関係を築いていました。先週から自分で授業も行っています。事前に学習指導案を作成し授業に臨んでいますが、想定外の生徒の反応や時間配分などに戸惑っている様子も窺えます。授業は最初からうまくできるものではありません。努力を重ねることで間違いなくよい授業ができるようになります。26日（金）に実習は終わります。まだたくさんの時間があるので、生徒たちの学ぶ姿を想像しながら授業づくりを頑張ってほしいと思います。

さて、現行学習指導要領の理念実現も道半ばの中、次期学習指導要領改訂に向けて「２階建ての教育課程」、「裁量的な時間」などを盛り込んだ議論が中央教育審議会等で続いています。もちろん社会状況の変化を踏まえて教育は変わり続けていく必要があります。しかし、今、学校はそれ以前に人手不足に苦しんでいます。「理想の教育」を掲げる声と、学校の「人材不足」の現実が、大きく乖離しているように感じます。教員の長時間勤務、管理職の過重責任、離職者数の増加など、教育課程の高度化を進める上で最も肝心な「担い手の確保」に対する対策が不十分では、政策の実効性は保障されないと思います。

「教育課程の質の向上」と「人゛し材確保」は同時に並行して取り組む必要があるのではないでしょうか。学校（教職員）が疲れ切っていては、どれほど魅力的なカリキュラムを構想しても、実現の可能性は低く、むしろ学校教育への不信や教職志望者の減少につながってしまいます。

背景には、若者の仕事観の大きな変化があると思います。かつては「安定」、「社会貢献」、「使命感」などが教職の動機付けとなっていましたが、現在はそれだけでは十分とは言えないのではないでしょうか。「柔軟な働き方」、「自己実現」、「成長機会」、「ワークライフバランス」など、働き方に対するニーズは多様化し、民間企業はそれに合わせて制度改革を進めています。教職だけが昭和や平成のスタイルのままでは、人材獲得競争に負け続けることになります。

教職を「選ばれる職」に変えていくために、Crimson Education Japan 代表の松田悠介氏は「時差出勤やテレワークの導入」、「休暇取得の文化醸成とマネジメント研修の必修化」、「教員の副業・兼業の制度化」、「『リターン教員』制度の設計」などの取組が必要だと述べています。これぐらい大胆な発想が必要なのかもしれません。教職を「選ばれる職」に変えていくために、学校として何ができるか、真剣に考えていく必要があると思います。